柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話：044-988-0004（柿生中学校）
http://www.kakio-kyodo.com
第 54号

柿生郷土史料館カルチャーセミナー

何と空中写真で遺跡が浮き彫りに！
“亀井館”と“古代・中世の館”跡か？

（月読神社西側）　（東柿生小学校敷地）

9 月 30 日（日）柿生中学校武道場において第 37 回柿生郷土史料館カルチャーセミナーが開催されました。

今回は國學院大學博士課程の朝倉一貴氏を講師としてお招きいたしました。氏は考古学を専門とし、とくに自然環境が残されている古い時代の航空写真をもとに先端技術を駆使し遺跡を割り出す研究をされています。そこで氏には今回、柿生周辺の古代遺跡の存在を調査していただきました。画像は昭和 23 年に撮影されたアメリカ軍の精密空中写真などを使用して今までの研究をもとに遺跡の所在を解析し、さらに 64 年前の柿生の立体地形図も作製してくださいました。

空中写真で見つかった遺跡の痕跡：
地図「明治 14 年迅速図」

その結果、月読神社近くに亀井館（ヤカタ）と思われる遺構（建物などの跡）の存在がわかってきました。亀井館は平安末期の源義経の四天王の一人である亀井六郎の「亀井」から来たといわれていますが、写真の遺構の時代はまだよくわかりません。

月読神社境内の碑文には、神社の位置を「亀井城の“卯”（東）の方に小島佐渡守が天文 3 年（1534）社殿を建立」と書かれています。したがって亀井城（館）は月読神社の西側にあたりますので判明した位置と合致することになります。しかし小島氏と亀井館との関係はよくわかっていません。

もう一方の東柿生小学校敷地周辺に見られる遺構の痕跡は、平成 5 年（1993）に、「東柿生小学校内遺跡」として体育館建設の際に調査が行われており、古墳時代中期（4～5 世紀）から中世（鎌倉時代～安土桃山時代）の遺跡が出土していることが分かっています。しかし空中写真で見られる痕跡がいつの時代のものなのかは、調査をしなければ実態を把握することはできませんが、城館と思われる遺構の痕跡が見られます。

講師の朝倉一貴氏と受講者

朝倉氏のお話の後、小島佐渡守の子孫でいらっしゃる小島一也氏（前柿生郷土史料館支援委員長）よりこれらの遺構と、その歴史的背景について語っていただきました。氏によると、下麻生で残されている「国領（コクリョウ=奈良時代頃から始まり、国が支配している地方の土地のこと。国の役所である国衙（コクガ）が管理している。）の地名や足利尊氏が正平 7 年（1352）に発した保寧寺（ホネイジ=鎌倉）領の御禁制文書に記されている『都筑郡麻生郷本郷並堀内（ホリノウチ=中世の武士の屋敷で、堀をめぐらして丘陵の先端部に造られることが多い）』の地名からも城館の存在を示唆されていました。

今後の郷土史研究にとって大変興味深いお話でした。　（文：板倉）

再開しました　シリーズ　「麻生の歴史を探る」 第24話

平将門

小島　一也

私どもの麻生と将門とは直接の関係はありません。だが将門が起こした承平・天慶の乱(931～940)の頃、この地方の農民はどんな暮らしをしていたのでしょうか。ちょうど今、黒川尻手線の工事で平安時代の遺跡が発見され、先には岡上丸山、早野、山口台などで住居跡が発掘されていますが、いずれもお粗末な侘しい掘立小屋での生活だったことが窺われ、この人たちは律令制度の苦役に耐え、貢物を都に送っていたのです。

時の都は京都の平安京。当初、官位を得ようと京に上った将門は、桓武天皇の曾孫というプライドと、朝廷を支配する驕れる藤原貴族から東夷(ｱｽﾞﾏｴﾋﾞｽ)と蔑まれる現実が相まって、東国に理想郷を夢見て国家権力に挑むことになります。常陸の国府を武力で破った戦いは一族間の争いにもなりますが、その苦難を扶けたのは東夷の東国武士と律令に苦しむ農民です。この戦い(承平の乱)は関東一円に及びますので、私どもの祖先もこれにくみしたのではないでしょうか。

将門まつり～國王神社から出発

将門の出身地は常陸国の岩井、今は岩井市と猿島町が合併して茨城県坂東市、坂東太郎の利根川中枢の地です。かつてこの地を訪ねたことがありますが、毎年11月、「一千年の時を生きる将門」と郷土の英雄を讃えての「将門まつり」が町をあげて行われています。神田明神太鼓と神田ばやし(県民俗文化財)にのった100名の武者行列に山車が出張り、大変な賑わいを見せています。そこには坂東という未開の地に豊かな理想国家を夢見た将門の先見性を敬慕し、時の国家権力に敗れてしまった悲劇を悼んでの、郷土人の温かい心情を見ることができます。

延命院～胴塚は廟所の前にある

坂東市には将門を偲ぶ史跡が多くありますが、その一つの國王神社は将門を祭神とするもので、茅葺の古色蒼然とした千年の社殿は県指定文化財となっています。将門の胴を葬る延命院は、将門の首が京都から東京大手町まで飛んだとされる伝承の大手町から碑が移され、市民の浄財で胴塚の石塔が造立されています。また、将門が開拓で水に困っている折、一人の翁がそこに立つと水が湧いたという「石井の井戸」は、農民とともに生きた将門を物語っています。

川崎市内にも将門伝説はあります。多摩区長尾に五所塚と呼ぶところがあり、昭和49年頃まで稚児の松と称する大松がありました。これは天慶の乱の折り、この地で京都朝廷方の5人の兵と一人の稚児が亡くなり、5人を葬ったので五所塚、稚児を弔い植えたのが稚児の松と伝承されています。

稚児の松

現中原区平間の八幡神社付近は、その昔、大野村と呼んだそうですが、関東を平定した将門は新皇を名乗り、ある日この地に到来、一夜の宿を求めました。ところが夜半不吉な流星に夢破られ、急きょ夜明けを待たずに常陸国へ戻り、故郷猿島里で討ち死にしてしまいます。これはこの地に残る伝承ですが、以来、大野村を苅宿(仮宿)と呼んだそうです。この地にある苅宿八幡神社のご神体は将門ゆかりの金龍石で、関東大震災時には社殿は壊れたものの付近民家の倒壊は一軒もなかったといわれています。

一代の梟雄平将門は、天慶3年(940年)故郷の猿島で死にます。だが貴族支配の朝廷に投じた一石は、大きく人の世を変えていくことになりました。

参考文献:平将門伝説の旅(稲葉嶽男)、坂東市史、川崎地名辞典

生麦事件の真相を探る（2）

―なぜ？ イギリス人殺害の理由は―

前回は生麦事件発生時の概要を考えてみました。今回は事件の背景について、もう少し掘り下げてみたいと思います。

事件の背景には何があったのか

①当時の日本人の外国人に対する意識を考えてみましょう

欧米諸国の圧力に屈して締結した日米修好通商条約(1858 年=続いて蘭・露・英・仏の5ヵ国と締結)や、条約締結による物価上昇などの経済的混乱などから反欧米への機運が高まり、倒幕、攘夷(欧米諸国を追い払うという考え)などの運動につながっていきました。

また記録(「国史教育」生麦事件で夷人を殺した私)によると、日本人が礼を尽くさねばならない大名行列に平然と乗馬しながらやってくる外国人に日本の侍たちは大変強い憤りを感じていたようです。我慢の限界で、ストレスもかなりたまっていたものと思われます。

②当日、被害を受けたイギリス人たちは何のために生麦周辺にいたのでしょうか

事件当日、死亡したイギリス人商人リチャードソンを含めた4名のイギリス人は、川崎大師見物のため、居留地(外国人が居住を認められた場所)の横浜から野毛山・平沼を超え、台町付近から海岸に出てボートで東海道の神奈川宿（JR東神奈川駅近く）に渡りました。そこから馬で目的地の川崎大師に向かう途中、事件に遭遇することになります。当時、外国人が散歩などに出てよい範囲は多摩川までで、その間の眺めは良い場所が多く、生麦の茶屋に立ち寄ってビールを飲み（すでにこんな店があったのですね!）、川崎大師を見物することが休日の定番コースとなっていたようです。

③当時、外国人は大名行列に対しどのような対応をしていたのでしょうか

実は事件が発生する直前、もう少し江戸寄りの場所でアメリカ人商人が薩摩藩の行列に遭遇していました。この時、彼は馬から降り、脱帽して敬意を表していました（当時、大名行列に土下座するのは御三家の行列のみでした）。そのためか何の問題もなく行列は通過していました。また幕府は、大名行列がある場合は事前に各国領事館に通報することもあり、問題が発生しないよう気を使っていたようです。

④殺害されたリチャードソンとはどんな人物?

リチャードソンは20歳のとき上海で貿易商を営み、上海～長崎間の定期航路を開設するなど財をなしました。28歳の時帰国することになりましたが、その前に日本に立ち寄ろうということで約1ヶ月前から日本で知人の家に逗留していました。

彼の評判は上海の商人仲間からは比較的良好でしたが、一方粗暴、礼儀知らずでアジア人を蔑視する態度がよく見られたという記録も残っています。

⑤事件発生現場はどんな場所だったのでしょうか

東海道といっても一般的には右の東海道生麦の錦絵を見てもよくわかるように道路幅が大変狭く、先頭付近はわずか2列です。殿様の駕籠(ｶｺﾞ)付近になると警護の数も増えるので、大変狭い状況の中で行列を進めていかねばなりません。このような中で4人もの外国人が馬に乗って行列の中に入り込むのですから、人も焦り馬も興奮するはずです。そんな中で発生した事件でした。

次回は事件の影響について考えてみます。

現在の事件発生現場付近
（写真左手看板付近）

錦絵「東海道之内　生麦」
（文久 3 年）

参考資料:「国史教育」=昭和12年、「薩摩とイギリスの出会い」　（文:板倉）

郷土の歳時記

11 月

霜月＝読み＝しもつき=意味＝寒くなり始め、霜が降りるという意味

◎文化の日(11 月 3 日)

この日は戦前「明治節」と言われ明治天皇の誕生日にあたるということからそのように呼ばれていました。現在では文化勲章が授与されたり、各種受賞者の伝達式が行われています。

◎七五三(11 月15日)

11月15日に3歳の男女児、5歳の男児、7歳の女児に晴れ着を着せて子供の成長に感謝し神社にお参りに行くもので、鎌倉・室町時代頃から公家の間で流行ったといわれています。今日のような姿は江戸時代から始まったといわれています。

もともとは、11月15日は収穫祭で1年間の収穫を氏神様に感謝する日でした。この祭日を選んで子供の成長を祈願したのでしょう。

◎勤労感謝の日(11 月 23 日)

この日は昭和 23 年(1948 年)に「勤労を尊び、生産を祝い、国民がたがいに感謝し合う」ことを趣旨として制定された国民の休日です。なぜこの日がこのような趣旨の休日になったのかといいますと、この日は古くから「新嘗祭(ニイナメサイ)」という儀式が宮中でおこなわれていて、天皇がその年に収穫された穀物や新酒を神様に供え感謝する日でした。

そんな意味で現代風の「勤労感謝の日」という名がつけられたのでしょう。今日でも皇室では「新嘗祭」を行っています。

∈∈∈柿生郷土史料館開館日のご案内∋∋∋∋∋∋∋∋∋

◎開館日：偶数月は土曜日、奇数月は日曜日

１１月４，１１，１８，２５日（毎日曜日）

１２月１，８，１５，２２日（毎土曜日）

◎開館時間：午前10時～午後3時

∈∈∈柿生郷土史料館8～11月の催物ご案内∋∋∋∋∋

第6回特別企画展

◎テーマ　『写真でたどる郷土百年の歩み展Ⅱ
～昭和20年より今日まで』

◎期　間：8月18日～11月25日

◎特別展示　写し出された132年前の下麻生の姿も展示しています。

★★★柿生郷土史料館と郷土へのご支援に感謝いたします★★★

（友の会法人会員様）

川崎信用金庫柿生支店　様
セレサ川崎農業協同組合柿生支店　様
株式会社すずゆう商事　様
株式会社カジノヤ　様

☆学ぼう郷土の歴史・守ろう郷土の文化☆